

## 47. 秋はメランコリーと共に

# 医事万華鏡

秋は成熟の季節。

かがやきを纏った非日常、

遠く過ぎ去った、永遠の時間、

である夏が終わり、秋は冬に向け

て身支度を始める前の、再出発の時、

です。なるほど、フランスの詩人ボードレール

は「秋の歌」の中でこう詠んでいます。誰のため

だろう、昨日は夏、今は秋。この不思議な物音は、まるで

出発のように鳴りひびく」と。

秋にちなむ歌と言えば、日本では藤原敏行が『古今和歌集』

の中で、『秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞ

おどろかれぬる』と詠んでいます。ここでは秋が目に見え

なくとも風と共に緩やかに訪れる様子が示されています。

そんな季節の移ろいを繊細に感受しやすい日本人の感性

は、季節の変化の影響をメンタル面で受ける場合も少なく

ありません。実際、夏が終わり秋に入ると過ごしやすくなる

のも束の間、鬱々として気分が晴れず、落ち込む方もお

られます。これは季節性感情障害（SAD）と呼ばれる症状

で、季節の変わり目の、日照時間が短くなる秋や冬に多く

見られることから「季節性うつ」や「ウインター・ブルー」等と呼ばれています。

さて前掲の藤原敏行の和歌では、「風の訪れ」

の中に秋が感知される情景が詠われましたが、

同じくボードレールの後に現れたフランスの詩

人ヴェルレーヌは、『秋の日の 昔、オロンの ためいきの

ひたぶるに 身にしみて うら悲し』（上田敏訳『海潮音』

より）と詠い、秋の訪れと共に囚われゆく悲哀とメランコリー

を吐露しているかのようです。もちろんこうした秋に対する

ヴェルレーヌ的な感性は、おそらく誰もが普遍的に抱く感覚

であるでしょう。時の移ろう姿がどの季節にも増して意識さ

れる秋は、万物が凋落を避けられないことを教えてくれる、

冬という『死の季節』の前触れの季節。であればこそ、人々

の心に奥深い余韻を残すのでしょう。

ただ一方で、秋は『芸術の秋』とも言われるように、憂鬱

なこの季節は「創造性」とも深く関わります。今でこそ科学

的根拠を欠く空想の産物と見なされますが、古代ギリシア・

ローマ期からルネサンス期を経て、近代医学の成立する19世

紀まで受け継がれた「四性論」によると、メランコリー（憂

鬱気質）は「黒胆汁・内向的・秋・東・壮年期」を象意します。

また、ルネサンス期にはミケランジェロが『憂鬱質こそ我が

友』と言い、メランコリーこそ創造活動の源と認識されるよ

うになりました。まさに秋が芸術の秋である所以です。マイ

ナスとプラスが同居する稀有な季節・秋。秋はメランコリー

と共にやってくるとも言えそうです。（JMS主幹・野村元久

